

2002年2月25日 日本テレビ定例会長社長会見 要旨

1. 4月改編の骨格と狙い

記者：まず最初に4月改編の狙いと、この1月期を振り返って。

萩原社長：

全体的に言いますと、例年の4月改編に比べれば、日本テレビとしては比較的大幅な改編ということが言えると思います。

何故そういうことになったかと言うと、今年は非常に景気が良くないという状況の中で、やはりトップカンパニーの座を死守するのは当たり前でありますけれども、こういう時だからこそ、独創的にトップを走ろうじゃないかという目標を持って臨んであります。

大きな改編だけ申し上げますと、まず朝の「レツツ！」を改編いたしまして、新しいワイドショーに切り替えます。「レツツ！」に続いてやっておりました「ホンの昼メシ前」という同じく情報ワイドショーは中止し、“レツツ後枠”的ワイドショーに制作力、制作費を含めて思い切って投入します。「ホンの昼メシ前」のところは、再放送で行きます。“レツツ後枠”は、峰竜太さんと麻木久仁子さんの強力なコンビ司会で、8時半からのワイドショーを乗り切っていきたいというのが、まず朝の改編です。

それからプライムタイムでは、思い切って今回は3つのバラエティー番組を替えます。

一つは長年続けて参りました「知ってるつもり?!」。これは、功なり名をとげた、今すぐやめなければならないというような数字ではありませんけれども、関口宏さんとも話し合いまして、終了ということになりました。ここに「行列のできる法律相談所」(仮)という、スペシャル番組で同じ枠で20%を取った企画でございます。

それから、金曜日の20時に今まで「ウリナリ」をやっておりましたけれども、ここに「マネーの虎」というのを編成いたします。これは、現在深夜で放送中の番組で、土屋編成部長がノルマを課して若手にやらせたところ、このノルマを見事にクリアした、栗原というプロデューサーが作った企画でございます。

更に木曜19時の枠を「女ゴコロはムズカシイ」(仮)にしまして、バラエティー部門も思い切って今回は変えてみました。

ドラマについては、今回は土曜日が野島伸司さんの脚本で。水曜日に関しては、共同テレビのプロデューサーをやっておりました加藤君というのを、昨年契約社員でスカウトしたんですが、彼を一本立ちのプロデューサーに起用してやります。

月曜のYTVのドラマは、「天国への階段」という原作のしっかりしたドラマで、堅実なキャスティングでやっていただくということでありますので、1月期のようなことは無いと、期待をしてあります。

大雑把に言いますと4月改編については以上でございます。

あとは、オリンピックが、非常に数字が低いということがありまして、とくに19時台20時台が強い我が社に、オリンピックハイライトで非常に低い数字が出ることは、我社の場合、マイナスの分が非常に多く出てしまっている。先週はついに視聴率3冠が取れなかったんですけども、その前、2002年1月の頭から7週間連続で3冠を取っており、とりあえず順調なスタートという感じです。

2. 110度CS放送開始に当たって（3波の役割分担など）

記者：110度CS放送がいよいよ3月1日から始まりますが、これで地上波、BS、CSと3波になる訳ですが、どういうふうにこの3波の関係をお考えになっているのか、このへんをお聞かせください。

萩原社長：

110度になると、BSとCSというのは、視聴者にとっては区別がなくなるんですね。そういう意味で言うと、ソフトの競争というのは、BS、CSの関係でも、結構激化するんじゃないですかね。片方は有料ですけど、べつべつのメディアっていうのが、考えにくくなってきますから、何をやるかが勝負になってきます。

記者：今後、共用機を買えば両方見られると思いますけど、110度CSが始まることによって、現在のBSデジタルに、どんな変化が出てくると思いますか。

萩原社長：

今のところBSは広告放送ですからね、それと有料課金であるCSというのは、自ずから、同じ110度で見られるにしてもですね、性格が明らかに違うと思うんですよ。

BSが、CS110度にどれくらいの影響を受けるかということに関しては、110度がどうなるかを、見極めないとBSの問題にどういう影響があるかということは、考えるのは早いかなという気がするんですけどね。

記者：漆戸社長はどうお考えでしょう？

漆戸 B S 日本社長：

今、萩原社長が言ったとおりですね、別に C S が出て、共用機ですから、その分だけ B S にとって見れば、視聴可能世帯が増えるわけですから、プラスにこそなれマイナスには全然思ってません。100 万でも 200 万でも増えてくれれば、逆に B S の視聴可能世帯が増える訳ですからね。

記者：スカパー 2 が 5 月以降スタートということなんですねけれど、なんかチャンネルプラン等々もはっきりしませんし、どこまで伸びるかわからないですねけれども、3 月に始められるということで、アドバンテージはこの件に関しては大きいでしょうか？

氏家会長：

我々はこの件に関してはアドバンテージを考えていません。我々が考えているのは、ジャイアントス戦を目立たせるというのが主ですよ。

記者：日本テレビグループとしては、どれくらい宣伝費につぎ込んでいるんですか？

氏家会長：

これは初期ですからかなりつぎ込んでもいいと考えていますよ。まだ、明細は上がってきませんけど。我々も少し意見を出してますからね。

記者：相当な力のいれようと考えていいいですか？

氏家会長：

宣伝はね、これは初期ですから相当やらないとダメですよ。

記者：受信側の装置ですけれども、どのくらいの期間で、どのくらいになって欲しいと思いますか？

氏家会長：

これはね、今のところ 1000 日 100 万台とか、言っているんですけど、いわゆる C A T V を経由する分は 200 万くらいは、最初から行くはずです。

3. メディア規制 3法案への今後の対応

記者：メディア規制の法案で、先週民放連のシンポジウムがありました。民放連からの自民党への意見書が出されました。これについての今後の対応などお願いします。

氏家会長：

これはね、非常に重大な問題なんでね、民放連だけの問題ではなく、新聞協会もやるべき問題です。新聞協会のメディア研究委員会を、東京6社で作っているんですよ。各社、専務くらいの人が出てます。そこに、ひと月くらい前に呼ばれて行って、事態をどう考えているか、という話し合いをしました。新聞協会の方も、メディア担当の人達は、メディア規制に対し、みんな共通の危機感をもっていますからね。

公的権力のメディア規制というのは、いかなる理由を付けようとも、これは許すべきではない。そのことから、民主主義が破綻をきたすんだということは、公理みたいなものですからね。一民放ということではなしに、言論機関全体の問題であるということで、輪を広げていこうというのが、私の基本的な考え方です。

政治権力によるメディア規制の動きに対する、我々マスコミの反撃っていう、その構図はね、非常に今後長い期間続く可能性がある、私は思ってます。

我々としては、断固とした姿勢を絶えず、貫いていかなければいけないと、こう思っています。

記者：その方策ですが、何か新しいいい知恵はございますか？

氏家会長：

これは言葉は悪いですが、モグラたたきと似ていると思います。出てきたら電光石火で攻撃を加えるということ、根負けした方が負けますね。キメ細かく関係団体には理解してもらしながらやって行きます。我々サイドに限って言えば、自主規制効果っていうのは、非常に上がっているのは間違いないんだよね。この議論はね、青少年や視聴者はメディアリテラシーなんか出来ないという前提にたっている議論なんです。

4. I T 関連規制改革専門調査報告会への今後の対応

記者：水平、垂直問題ですけど、今後の対応についてお話を。

氏家会長：

ハードソフト問題はね、なぜ、今頃あんなもんが出てきたかというのが、全く解らないんだよ。実態から言ったってハード・ソフト分離すれば、放送の社会的機能が無くなるってことわかっているだろう。放送のソフトというものは、情報とか、ニュースとか、ただ単なるエンターテイメントだけじゃない、バナナの叩き売りみたいな商品じゃないんだ。この話は、はっきりしているんですよ、ハードとソフトを分離した時に、“9.11 テロ”の時に、どこが直ちに放送したかと言えば、地上波ですよ。何でかというと、ハードとソフトが一致しているからなんです。他は分離しているから、予定の無い放送は入れられないとか大騒ぎになったんだよ。そういう放送がもっている、社会的な大きな使命ってものを無視した、放送内容はバナナと同じであるという議論で成り立っているんだよ。このハードソフト分離論というものは。

5. 民放連会長選についての所感

記者：民放連の会長選考について。

氏家会長：

非常にまずかったのが、日枝君に病気になられたこと。一度彼と話し合って彼の意見を最終的に聞いてみようと思っているんだ。日枝君が病気でダメだからって、俺にもう一回やれって言ったって、とてもじゃないけど大変なんだ。僕のところで一手にやらされたって、とてもじゃないけどできる訳ないんだよ。

だから、トータルでやるようなシステムを作らなきゃ民放連というのは、今後持たない。今までの仲良しクラブの名誉職みたいな会長ならいいよ。だけど、地上波の存亡をかけて戦うという考え方をするならば、全てのネットワークが責任を負うようなシステムを構築しないことには、できないよ。それを、構築すれば誰でも出来るんだよ。

記者：氏家さんがおっしゃっている集団指導体制とか、まあ機能強化は、会長が誰になるにせよ、やらざるを得ないと。

氏家会長：

僕以外の誰でもできるよう考えている。とにかく一度、日枝君の意見も聞いてみたいんだけどね。

記者：あらためて集団指導体制っていうのは、具体的にはどういうことを意味されているんですか？

氏家会長：

私がイメージしているのはね、例えば、経団連とか民間団体で起こっている動きを、それだけ集中的に取材し検索する、そういう部門。それから、例えば政界の与党と野党に分け、与党だけやるもの、野党だけやるものとかね。あるいは、官界の官庁のうちどことどこなど…各ネットワークで責任もってやる。役割分担をして、いかに早くね、動きを察知できるかがね、対応の力なんですよ。

民放連の組織としては、この間も会長・副会長会議で言ったんだけど、幹事会みたいなの作ってね、緊急対策委員会の中の幹事会みたいなのが、非常にいいんじゃないかなと今考えているんだけど、その幹事会が即決できるようにする。そういうのが一番いいんじゃないのかなと思ってますけどね。

記者：そういう体制改革が無いかぎり、会長は再選を固持するというか。

氏家会長：

僕は僕以外の人にやってもらうために、そういうこと考えているんですよ。僕はやる気がないよってことなんだ。いわゆる集団指導体制の中に残れっていうなら、残ってアドバイスはしますけどね。

一つの可能性としては、日枝君自身の問題もあるんだけど、日枝君がもしやれるんだったら、今、日枝君を会長にしておいて、しばらく僕が代行してあげるよとかね。そういうこともありえるかなという気もしているんだけどね。

数日中に日枝君に連絡して、話合って意見聞いてみようと思しますけどね。

以上